



Short Interval of Silence



鳴瀬羽迦

キセキ

「キセキ」

探している answer song

この軌跡の先に みつけることを願って

その鼓動の中に 奇跡を起こして

「Wish」

遠い国の人 住む世界が違うの

今の私は最低レベル 地の底を這うようだよ

遠い国の人 雲の上にいるのなら

雨を降らせて 涙を隠したいから

「fossilize」

琥珀に閉じ込められて 止まった時間のまま

答えの出せない心は そんな感じ

まるで他人事のようにみつめて 握りしめる

「distress」

足早に通り過ぎてゆく 今日の話題

明日の記憶に 残るだろうか

だけど 遠い思い出は過ぎるほどに

くっきりと 輪郭を浮きあがらせる

その鋭さに ココロを切られる

ゆめうつつ

「ゆめうつつ」

きはくながんじつ リアルなゆめ

アラームでめをさました それはどちらのせかい

きっと かなしみをかんわしたいから

きっと かなしみをのりこえたいから

これはココロのさよう わかっている

みうしなわないで しんのじぶんを

「木星と金星」

夜色へと深まる空に

並んだ木星と金星

どんなに近づいたかのように見えても

ほんとうはとっっても離れている

なんだか人の心みたい

なんだか少し切なくなる

「化石」

降り積もる 時が

埋もれてゆく 時に

化石となる 想いは

言葉という 形の

いつか地層の裂け目に 現れたなら

その手にとり 甦らせてください

「魔法」

好きなものを側に置くとホッとする。

好きな人たちといっしょにいるとあったかい。

好きなことしている時は楽しい。

日々の中、大好きという魔法。

炎

「炎」

きっと この一年を生きる わたしの心

強き風に 吹かれれば 消えてしまいそうな

そんな 不安も抱えつつ それでも 轟々と

燃やしてゆく あらゆる 雑念を焼べて

「ペテルギウス」

今生 超新星爆発を 見ることできるのかな

幼き頃より 語りかけていた 星座 その形を 変えるのでしょうか

天空の目印 冬の大三角は 友を失うのでしょうか

日々 辛きことも その大イベントを眺められるのかと期待する そのココロで

乗り越えられそうです 幼き頃からの 宇宙（そら）の道しるべよ

「UNIT」

耳触りのよい音楽を聴きに行こう

そこにまだ私の場所がありますように

心に凍みる旋律に浸りたい

ひとり涙したいライブだってあるの

そこにまだ私の場所がありますように

「solitude」

囁くような歌声と 明りを落とした部屋に 揺れるキャンドル

何を想う 昨日までの呼吸 明日の青い空 未来を思い描こうと

押しつぶされそうになる問題の中で 簡単な迷いに 気を紛らわす

髪をそろそろ 切ろうか伸ばそうか と 他愛もなきこと

宇宙（そら）は孤独ですか この星には こんなにも生き物たちがいるのに

その孤独は 変わらないものでした 自らであり続けるために

「君の眼」

明日の夢に浮かれていた あの頃

夢をたたんだ その人の気持ちがわからなかった

差し出された手に 引き寄せられることなく

それは さよならの握手にして 離れた

互いを見送る 二度と逢えないこと知らず

その瞬間には気づかないもの branch road

みつめていた 君の眼の力だけ まだ胸に刺さっている

抜け殻

「抜け殻」

ガラスケースの中に飾られた 人形

のようだった そんな生き方をしていた

人形の身体の中は 空洞 まるで蟬の抜け殻

のようだった 心は羽化して何処かへ

飛んで 行ってしまったのだろうか

人形の身体は 乾涸び 風化し 粉々になってゆく

ようで それを見ていたのは 誰なのだろう

「闇夜」

室内にはエアコンの音ばかりが響いている

閉じたカーテンの向こうは もしかして

漆黒の闇 なのではないか と 疑う

切り取られた空間に 閉じ込められた感覚

「悪夢」

悪夢に目を覚まされた それも悪夢

いないはずの人間が 蠢めく気配に怯える

見開いた目には 何も映らない

手を伸ばし 明りを点けた これは現実？

「無」

静かに生きたい

争いのあったことなど忘れて

記憶を閉じることは簡単なの

だから思い出す呪文を投げかけないで

頭が割れそうに痛むから

呼吸が苦しくなるから

静かに生きたいの

名前も顔も知らない人になるまで

何もなかったように

空のステージ

「空のステージ」

空を 心と観上げると

幻日が現れていたり 彩雲をみつけたりする

さっきまでの俯き気分を忘れてしまうよ

空よ ありがとう

都会でも ささやかな気象光学のショー

地上とは違うステージは

天空からの贈り物のようで

俯いている人 空を時々見上げてみよう

「Heroine*」

暮れてゆく空を 水先案内する上弦の月。

枝豆とビール アンニュイな曲*。

疲れているけど 幸せな一日の終わり。

「Energie Port」

霧笛が響きカモメが飛んでいる

今日は大型の客船が棧橋につけている

赤レンガ前では夏祭りの準備

蜃気楼あがるアスファルトに風が渡る

かつての活気を彷彿するオブジェとなった線路

ここに来ると人の力を感じる